

防災
まちづくり
大賞 20年

第5回受賞

東日本大震災から学んだこと 方針転換! 『避難』から『籠城』へ



東京都江戸川区 なぎさ防災会 副会長 鈴木 正彦

「なぎさ防災会」は、東京都江戸川区南葛西にある「なぎさニュータウン」の自主防災組織です。平成7年の阪神・淡路大震災を契機に、マンション管理組合と自治会を母体に平成8年に設立され、昨年12月で20周年を迎えました。



なぎさニュータウン全景

防災会設立当初から関東大震災の際、住民のバケツリレーで延焼をくい止めた「関東大震災の奇跡」と呼ばれる神田佐久間町と和泉町の事例を手本に「自分達の街は自分達で守る」をスローガンに掲げ、「楽しくなければ防災じゃない」という遊び心の精神も忘れず、活動を続けてきました。



大名火消し半纏と桜吹雪Tシャツがユニフォーム

その間、独自の防災ハンドブック発行や「避難完了マグネットシート」等の開発を行い、防災会設立4年目の平成12年度には第5回防

災まちづくり大賞 総務大臣賞をいただくことができました。

1 総務大臣賞受賞…その後

月に一度の役員会で出た意見・提案は会長(当時)の「よし、やってみろ!」の一言で、すぐに行動し、形にしてきました。

炊き出しには、自衛隊も使用している移動式炊飯器「レスキューキッチン」が必要だ!となれば、それもいち早く導入しました。

マンションの内階段でも取り回しが容易な「布担架」も自主開発しました。



大地震で交通機関がマヒして、帰宅困難になったことを想定した「帰宅困難者体験訓練(キタコンウォーク)」は今年で16回目になります。このように受賞後も精力的に活動を行ってきました。

2 東日本大震災が大きな転換点

ソフト、ハード両面とも充実した防災活動を実践、「自分たちの街は自分達で守る」(つもりだった)我々にとって、平日昼間の東日本大震災は大きな課題を投げかけました。防災会員の大半が帰宅困難者になったのです。

在宅していた防災会員が中心となって安否確認や被害状況把握を行いました。少人数では、全89フロア1,324戸の安否確認は容易ではありません。自治会役員、管理組合理事も在宅していましたが、マンションとして一

体となった動きはできず、少ないマンパワーがさらに分散されてしまいました。

3 新たな活動の課題とゴール

大震災の教訓を活かし、震災直後から新たな取り組みを開始しました。

1. 災害想定

平日日中、マンションが最も手薄な状況での発災を前提に検討。

2. 組織体制

責任者を決め、組織を立ち上げるよりも、住民が安否確認を自主的に行う全員参加型仕組みが必要。

3. 三位一体の活動

自治会、管理組合、防災会が日頃から防災について動ける体制。

■検討途中で判明した事実

- ・耐震診断の結果、マンション建物の耐震強度には問題がない。
- ・エレベータは停止。高齢化が進む当マンションでは避難は不可能。
- ・避難所に入りきれない。避難所にはプライバシーがない。

それならば



1. 『避難』をせず、『籠城』を!
2. 迅速な安否確認体制の確立を!

4 新たな活動の課題とゴール

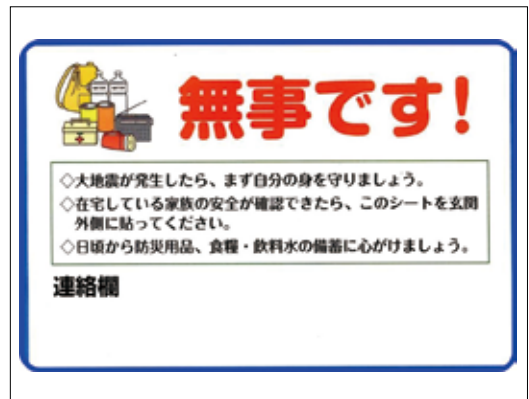
1. なぎさ防災システム検討委員会設置

2012年4月、自治会、管理組合、防災会から委員を選出、防災に特化した検討を行っています。一般住民には高い「防災」に対するハードルを下げるため、原則毎月開催の会議は50回を超えました。籠城と迅速な安否確認に向けた施策は着実に進行しています。

《主な施策例》

⇒『東京防災』の内容を独自にアレンジした

- 防災ガイド付き住民名簿の発行。
- ⇒家具転倒防止キャンペーン実施。
- ⇒安価な簡易トイレの作り方紹介。
- ⇒備蓄品の実物、簡単調理法紹介。
- ⇒100均で揃う防災グッズの紹介。
- ⇒「無事」が一目でわかる玄関貼付用マグネット『無事です!シート』の全戸配付。
- 放送を合図に一斉に貼り付ける訓練も実施。



玄関ドアを見ればノックは不要!

2. なぎさ防災システムの確立

マンションの特徴・構造を活かし、住戸⇄フロア⇄号棟⇄災害対策本部という伝達ルートを確立し、何かあったらフロアで助け合う「近助」の考え方を広めました。同じフロア同士なら、災害弱者がいても、上下階の移動なしで助け合うことができます。

5 今後の課題

現在、「こども防災教室」や年4回の定期訓練、防災研修会、キタコンウォーク等を開催していますが、防災会員が必死になればなるほど、防災に対する一般住民との「温度差」が広がってしまいます。一般住民が行動しやすい防災活動を進めていけるよう、これからも多くの事例を貪欲に集め、参考にしていきたいと考えています。